深志高校新聞
発行所
長野県松本市蟻ケ崎
松本深志高校
新聞委員会
編集責任　掛川裕史
編集顧問　浅輪賢治
印刷所　信州印刷KK

惰性打破なるか　生徒会

新生徒会発足

◇……選挙が行われ新生徒会にバトンタッチされると、毎年同じことが繰り返し述べられる。にもかかわ……◇
◇……らず生徒会の前進はほとんど見られないのが現状である。
◇……今年も十月末に新役員が決まって約二ケ月が過ぎ、現在予算案の作成が進められている。これから……◇
◇……も新生徒会が直面する問題は、数多いだろう。この辺で会員ひとりひとりが原点にかえって生徒会を……◇
◇……見る必要があるのではないだろうか。

〝ホームルーム投票〟という不十分な形ではあったが、一応公約の機構改革の任を果たし、四十七年度の生徒会はその任期を終えた。

大会の流会、会員の無関心など多くの問題をかかえる生徒会であるが、そんな中で例年通り新役員の選挙が行われた。

新役員選挙は、選挙管理規定に基づき、十月十一日に告示され、十月三十一日投票と定められた。例年の如く告示してしばらく届け出がなく、締め切りの十八日間際になって相ついで候補者が名のり出た。そして、締め切りの十八日までに会長二名、二年副会長二名応援団長一名、議長団に一年二名会計監査員三名の届け出があった。しかし、一年副会長と二年議長には一名の届け出もなく、その役に限り、締め切りを二日延ばし十月二十日とした。幸い一年副会長には一名の届け出があったが、二年議長には相変わらず届け出がなく二年の議長は補欠選挙を行なうこととなった。

補欠選挙となった二年の議長のポストを除いて、十月三十一日の投票日を目ざして各候補者の選挙運動が行われたが、会員の関心のうすさに信任投票が多いことも手伝ってか、焦点のぼけたような、あまり盛り上がりのない選挙戦であった。選管でも、選挙公報を配布したり、立会演説会を催したりしたが、それらを利用したものは少なかった。しかし、立会演説会では、出席者こそ少なかったが、内容的には充実した面も見うけられた。

そして十月三十一日のホームルーム時に各ホームルームに於いて投票が行われた。選管の手により即日開票され、会長に中沢稔君、二年の副会長に塚本洋一君、議長には伊藤洋君が選ばれ、残りのポストもすべて信任された。

又、残った二年の議長の補欠選挙は一ケ月ほどのち十一月二十五日に告示され、十一月三十日届け出を締め切ったが、定員二人に対して一名の届け出しかなかったため、締め切りを二日延ばし十二月一日とした。しかし結局それ以上の立候補者はなく、一名欠員のまま信任投票が行われることになった。十二月九日のホームルーム時にその投票が行われ、松沢克彦君が信任され、二名の議長団を決定した。

またこれに伴い各委員会や運協学協でも新らしい役員が決められた。生徒会の新役員は次のとおりである。

会長　中沢　稔　二ノ七
副会長　塚本洋一　二ノ一
　　榛葉裕幸　一ノ二
会計経理
　黒岩更成　二ノ六
　高橋啓子　二ノ一
　唐沢多津子　一ノ二
会計監査
　碓井　稔　二ノ七
　武居克朗　二ノ六
　斉藤久志　一ノ六
議長団
　松沢克彦　二ノ八
　伊藤　洋　一ノ四
応援団々長
　水野好清　二ノ二
委員長
厚生　塩原寛久　二ノ一
図書　鞏　稔　二ノ七
放送　原田敏正　二ノ八
校友誌本木章喜　二ノ二
新聞　掛川裕史　二ノ二
交通安全　鈴木仁志　二ノ一
選挙管理　宮沢敏子　一ノ七
合協・学協会長　二ノ四
　中野和広
運協会長宮崎哲男　二ノ三

× × ×

尚、十月末及び補欠選挙の結挙は次のとおりである。（資料　選挙管理委員会）

生徒会役員選挙結果
▽会長
当　中沢　稔　五三七
次　沼　尚司　二九六
　　二五六
▽二年副会長
当　塚本洋一　五二二
次　横浜寿一　二九二
▽一年副会長
　榛葉裕幸　信任　六四六
　　不信任三〇五
　　無効　一六八
▽一年議長
当　伊藤　洋　三九四
次　宮尾圭子　三二七
　　無効　三四二
▽応援団長
　水野好清　信任　六七一
　　不信任二七二
　　無効　一四六
▽会計監査
　碓井　稔　信任　六九二
　　不信任一九七
　　無効　一八二
　武居克朗　信任　七一〇
　　不信任二二二
　　無効　一七七
　斉藤久志　信任　六三六
　　不信任二四四
　　無効　一八四
▽一年副会長
　榛葉裕幸　信任　六八七
　　不信任二二七
　　無効　一二八
◎補欠選挙
▽二年議長
　松沢克彦　信任　六八七
　　不信任二二七
　　無効　一二八

榛葉副会長

塚本副会長

中沢会長

生徒会長　中沢　稔

〝何かに燃やすのが若い命、何かに賭けるのが生きてる青春さ……〟この歌詞は（文句はこれでよいのかわからないが、こんなふうに聞こえた。）テレビでやっていた「ミュンヘンへの道」の主題歌である。ミュンヘンで活躍した選手たちがこの歌を聞いて何を感じるかはわからないが、ぼくは一つの青春の真理があると思う。ぼくの応援弁士の菅野君が「中沢は生徒会長にならなければ〝生る屍〟になる。我々は中沢を〝生る屍〟にさせる権利はない。」と、いとも冗談ぽく言ったが、ぼくが会長になり得なかった時、その場限りであれ、又は永久にであれ〝生る屍〟になるというのは確かであったと思う。ぼくを生徒会長にしてくれた皆に感謝します。それと同時に、生徒会をこれから一年間やって一人の人間としてでなく、深志の生徒会長として満足するようにならなければならないと思うと、重大な責任を感じます。

さて、深志生はどの程度、高校生活を満足しているのでしょうか今年のとんぼ祭などを見ても、多くの人は日頃「若い命」を発散するところがないようです。自分の「若い命」すら発見できないでいる人もいるでしょうし、又今は勉強して、大学へ行ってから満足するからいいと思っている人もいると思います。しかし、我々は今、深志で、自分の「若い命」を発見し、満足しなければならないと思います。人間の常として、中学時代に満足しなかったものを高校時代に求め、高校時代に満足しなかったものを大学時代に求め、また、そこで満足しなかったものを次の世界で求める。そして、結局のところ何も満足せず「過去への郷愁」で寂しい満足を求めるのです。

だがぼくは、明日死ぬかもしれないから今の一瞬を大事にしようとまでは思えません。人間は明日生きることを予想しているからですたとえば明日テストだから勉強するとか、etc、etc、また明日あることを予想するから予定というものがあるのです。ぼくは予定の存在は認めます。しかし、高校の三年間という単位で（三年という一定の期間は与えられたものであるが）一つの区分けとして満足しなければならないと思います

今の深志の授業というのは、大学入試を大前提にしていることは否めないことで、必然的に深さよりも広さを求めようとしているものであります。そして、授業のみならず、我々自身もあらゆる分野に急速に進歩する社会に追いつこうと、深さよりも広さを追いかけているように思います。これらの事は結局、物事を客観的にみる目は肥えさせますが、事実に直面して考える力を養えさせます。頭デッカチなだけで世の中を変える力を養えさせているのではないでしょうか。そして、物事を客観的にみて「教養の遊び」をしているのです。物事を客観的にみることももちろん意義があり、これがなくても困るわけですが、客観的な物の見方だけする人間がエリートとして、中央に出て行くのかと思うとぞっとします。以上のような理由で（理由になっていると思いますが）何か一つのものに直面して燃えることも必要だと思います。そして、その何かは生徒会の中にも多分に含まれていると思います。だからこそ生徒会は存続しているのです。これらのことを考えると「生徒会とは何ぞや」という質問に「若者の情熱で動かすもの」ということを、私自身の個人的な意見ながら、議長の立場から述べると次の三点になる。

まず最初に、PRを積極的にすることだ。生徒大会が、いつ、どこで、何の議題でやるか、ということを伝えるのにも、いろいろ方法がある。今までのように提示するのも一つの方法だ。また、会員一人一人にパンフレットを配るのもよい方法だと思う。だが、私はもっと放送を活用したいと思う。視覚に訴え、聴覚に訴える。少しは効果が上がると思う。

次に評議員会で、会員の意見、希望を積極的に吸い上げる。評議員会というのは、単に予算の審議とか、役員の承認とか、形式的なことだけをやるものではないと思う。もっと生徒会を活発にするにはどうするか、どんなことをやったら会員が興味を示すか、ということを話し合うのも評議員会の仕事だと思う。これに関連して、アンケートも数多く出したいと思う本部や、各委員会のアンケートとは別に、議長団として、直接皆さんの意見を聞きたい。

三つ目には、討論会の開催である。先ほどの本部の行事アンケートにもあったが、私個人としてはマンネリ化されてしまうと思う。どんなに簡単なテーマでもよい。一つの事について会員が話し合うことは意義のあることだと思う。そして生徒大会とは、別の観点で生徒会の現状を見つめるのに、是非必要なものであるとも考える。いろいろ述べたが、議事進行の上での基本方針は、選挙の演説で言ったことと変わりはない。すなわち、司会的な議事進行である。これによって、進めていくつもりだ。しかし、最終的に現段階か意慢とも言える深志生徒会会員の無関心を打開できるのは、会員自身である。

少なくとも、生徒大会にはできるだけ参加してほしい。そして、もっと自分が深志生徒会会員であることを自覚してもらいたい。

皆さんの参加が増加することを期待する。

議長団

松沢議長

伊藤議長

議長　松沢　克彦

議長としてこれから一年間仕事をすることになったけれども、今第一に思っていることは、生徒大会を大切にしていきたいということである。

確かに、生徒会というものを、ある程度まで無視しながら深志で生活して行ける諸君も多いが、我々全ての生徒が、多かれ少なかれ生徒会というものから恩恵を受けていることは否定できないであろう。深志に生活する以上、その生活の基盤には必ず一生徒会員としての生活があるはずである。もちろん、その意識が常に我々の表面に表われているわけではないが。

深志に生活し、その生徒会員である以上は生徒会を無視してはならない。しかし、現実には生徒大会の現状を見ればわかるように、これを無視する人間が多すぎる。いやな風潮だ。

僕は毎日毎日、生徒会に関心を持てというのではないし、そんなことは不可能だとわかっている。ただ、生徒大会の時ぐらい、「自分は深志生徒会の監視人である」というような自覚があれば良いと思うのである。

実際、生徒大会召集の連発はみっともない。生徒大会を大切にしようではないか。

議長　伊藤　洋

私が議長に選出されてから、早くも半月たった。半月の間に評議会を四回したが、そのうち一回は早くも流会になった。覚悟はしていたが、深志の現状を見せつけられたような気がして、残念に思うだが、私達の立会演説会のときは深志の中に明るいきざしを見た。それは、我々候補者へ対する数々の質問や、局所をついた、建設的な意見や批判が出たことである。特に私は、自分の甘い考えを鋭く批判され、実によい勉強になった。このような面がまだ残っているのだから、やりようによっては、深志の生徒会を後退の道から救うこともできよう。

それではどのようにやるのか、M君が、答えてくれたのももっともなことだと思います。

次に自治ということについて言わせてもらいます。ぼくは今の深志の生徒会（あるいは深志生活全体）を表現するのに、自治というと言葉は使わないほうがよいと思います。与えられた自治は「自治」でなく、奪いとった自治が「自治」なのです。学校側から奪いとるということでは、これ以上の進展はあまりないでしょう。（でもまたあるとして追求するつもりですが）自分の心の中に奪いとる自治は十分すぎるほどあると思います下はきで校舎内を歩くかぎり、部室がきたないかぎりはetc、自治というこうじをしないかぎり、そして言葉は深志の図書館の辞書にはないはずです。これらのことを、生徒会の本部で対策を考えて、一掃すれば自治なのでしょうか。そうではないはずです。生徒会本部ではないかぎり希望を胸に「深志の自治」を信じていると、先生方から忠告をうける。本部が主意する前にましてや学校側から注意をうける前に、これらつまらぬ問題を自らで、自らを治めることによって解決できないの深、自治もなにもありません。高まいにも自治、自治とよく口にすることによって、自治があるかの如く考えるより、謙虚に自分を反省してこそほんとうの自治があるのではないでしょうか。

生徒会長として、今多くの希望（深志生への期待といった方がよいかも知れないが）と多少の不安がある。この希望がにせものならば、ぼくのショックは大きいだろう。（人間には、絶望的なピンチよりも、もっとたちの悪いピンチがある。そいつはなまじにせものの希望のあるピンチってやつだ――あしたのシェーより）

副会長　塚本洋一

僕は生徒会の存在理由を、自律的、批判的文化活動を誘発し援助することに見出します。運協、学協、専門委員会への多額の補助、トンボ祭のときの有志団体への補助、合唱コンクール、トンボ祭、燈籠コンクール、クラスマッチなど全てこのことにほかなりません幸いにして深志では課外活動の自由が広く認められています。やりたいことはなんでもできるという気風があります。そのうえ深志におけるー最大の組織である生徒会でバックアップすることが可能ならば、あらゆる方面の活動がしやすくなると確信します。それが個人であろうと有志団体であろうとも全校であってもかまいません。生徒会本部は特に、全校を対象とした活動を計画執行していくつもりです。他の場合は援助の形をとります。僕が公約にあげた行事もありますし、最近取ったアンケートなども参考に活動計画を立てていく予定です。

近頃昇降口の黒板に学校側から校舎内が目立って汚れがひどくなってきたのは上履と下履の区別ができていないからなので注意するようにと書いてあったのは、皆さんも知っていることと思います。僕はこれを見て、深志生たる者、先生から小学校級の注意をされてよいものであろうかと非常なショックを受けました。また各クラス担任の先生からお小言の中に必ず掃除をやれというのがあると思いますが、これとても小学校級。終業式で上恵さんの話を聞くに至っては、はたして実際にそのような事実があるのかと疑わずにはいられませんでした。常識が常識ではなくなるものが増えてきていることは明らかです。そこで今後学校側からあのような注意を受けないようにするために、われわれ自身の手で尻拭いをしなければならないと思います。一つの原因に生活上の規則がないことがあげられます。校舎に下履であがってはいけないという規定はどこにもありません。したがって下履で上がっても別に後ろめたい気持ちは起こらないものです。裏付けがない限り注意しても守られるはずがありません。それより深志には親切に注意してくれる人は存在しません。一つの対策に規定を作ることがあげられます。この機会にわれわれは生活上のこの問題を考えなければならない。くだらないと言って決して済まされるものではありません。

以上いいたいことを述べてきましたが、生徒会はあくまで会員が主体であり、特定会員の手に委ねられてはなりません。助言と協力をお願いします。

副会長　榛葉　裕幸

深志に、共有の意志でなくとも生徒会が存在する限り、その当事者となる者は、率先して厳たる校風を堅持して行かなくてはなるまい。

僕がこの紙面をもって現生徒会体制についての批判を述べることはよそう。皆が言い尽くしたものであるだけに、君らの自覚を待ちたい。

運命なのだろうか。深志という集団の一員として、それが成員として存在している僕達の間に、己れのエゴイズムが許されて良いはずがない。そうだろう？

せめて深志の中では――お互いに信じあうことができればすばらしい。これが惰性であってはダメだ。慣れ合いを否定する感情が自然に発露された時こそ、その時こそが理想の限界なのであろう。これはすばらしいことなんだ。

光太郎は、君に次の様に詩（うた）っている。天声と思って自己を省みてほしい。

冬の詩　（道程より）

冬だ、冬だ、何処もかも冬だ。
高台も冬だ。
馬車馬のように勉強する学生よ
がむしゃらに学問と角力（すもう）をとれ
負けるな、どんどん卒業しろ
インキつぼをぶらさげ
小倉の袴をはいた若者よ
めそめそした青年の憂鬱病にとりつかれるな
マニュアリストとなるな
胸を張らし
大地を踏みつけて歩け
大地の力を体感しろ
汝の全身を波だたせろ、やり直せ
向を描いても
生を得よ、たった一つの生を得よ
他人よりも自分だ
社会よりも自己だ
外よりも内だ
それを攻めろ
そして倍じきれ、
孤独に深入りせよ
自然を忘れるな
自然をたのめ
自然に根ざした孤独は
とりもなおさず万人に通じる道だ
孤独を忘れるな
万人にわからせようとするな
第二義に生きるな、
根の感激に耽る事を止めよ、
楽より衆人の口を無視しろ
比較を好む評判記を笑へ
ああ、そして人間を感じろ
愛に生きよ、愛に育て
冬の峻烈の愛を思へ
裸の愛を見よ
平和のみ愛の姿ではない、
平和と慰安とは卑屈者の糧だ
ほろりとするのを人間味と考えるな
それは循俗味だ
氷のように意力のはちきる自然さを味わへ
いい世界を作れ
人間を押し上げろ
未来を生かせ
人類のまだ若い事を知れああ
風に吹かれる小学の生徒よ
伸びよ、育てよ
魂を鍛へろ、肉を鍛へろ
冬の寒さに肌をさらせ
冬は未来を匂み
未来をはぐくむ
冬よ、冬よ
躍れ、叫べ、とどろかせ
冬だ、冬だ、何処もかも冬だ
見渡す限り冬だ、
その中を僕はゆく
たった一人で

一九一三・十二

昔は確かに良かった。脳裏をかすめる数々の思い出は、凄とはしているけど、純粋な気持ちに浸らせてくれる。幼かりし頃は良かった。あの頃より、大変な成長をしたものだと感心するけど、その裏には、精神的退化の足跡がある事を忘れてはなるまい。

現在君が持っているところの思考を原点にもどし給え。光太郎の叫びを聞いた君には、決して不可能なことではない。深志の未来を創造するものは、ここから生まれる。

× × ×

以上、新役員の言葉である。

何度も同じことを言うようで恐縮だが、現在〝生徒会〟を根本的に考え直してみる必要があるのではないだろうか。もっとも、こんなことは、今に始まったことではない。少し歴史を遡って昭和が三十年代から四十年代に移る頃の新聞を見るにつけても、〝今、生徒会は一つの曲り角にある〟〝自治の精神とは単なる自由であるわけはない……」etcなどの文はあちこちに目につく。つまり、その「曲り角」は現在でも「曲り角」であり、未だに曲りきれないのである。否、曲りきれないどころか後ずさりしつつあるとも言えるかも知れない。なぜなら、年を追うことに〝生徒会、マンネリ化〟〝会員の無関心、生徒大会流会〟などと生徒会の批判はきびしくなるからである。新生徒会の誕生とともに、その批判に対し新しい期待がかけられ、結局は何の変化もないまま次期の生徒会へ引き継がれる。この繰り返しであるそこには、役員（旧執行部）の努力による歯車の空まわりと深志生のエゴイスティックな一面が残ったのみである。こんな繰り返しのうち、一部の者が苦労に苦労を重ねているにもかかわらず、一般会員の間には「他人事」の感情がいっそう積ってしまったのである。そして現在――いやその前に一人一人がよく考えてほしい。――生徒会を。

新生徒会が出発して二ケ月。その前途は多難である。しかし、生徒会が少しでも前進することを望みたいものである。

――だれか掃除当番の人が拾ってくれることでしょう。中には、ていねいに飛行機を折って、教室の中ではあきたらず、窓の外へ投げる人。これがまたよく飛ぶんだなあ ひらひら舞いながら実に気持ちのよさそうだこと。あっ前方に大木発見。もうよけきれない。しかしも無事に枝の上に不時着しました。――いつかは、風がどこかに運んでくれることでしょう。

深志生って、どうしてこうも無責任人間が多いんでしょう。そんなあなたが、やがて公害企業の社長になるんですよ。――えっ、何もあなたが社長になれる素質があるなんて言っているんじゃないんです――

さて、どうしたら、このよごれきった学校をきれいにすることができるのでしょうか。第一条、それは――よごさないこと――なのであります。皆が一人一人、よごさないように心がけること。ちょっとすくを出せば、屑かごはすぐそこにあります。もう一分でも早く来れば上履にはきかえる暇間も十分あります。こんなことくらいなら、小学生だってちゃんと出来ています。しかしどれだけ注意しても自然に少しは汚れるもの。そのほんのちょっとの汚れを、毎日毎日、その日の分を掃除していれば、掃除だっていたってかんたんになると思うのだけれど。先日も上、下履のことは職員会で話し合われ、昇降口の黒板にも、注意するようにと書かれました。言われなくちゃ出来ないなんて、まったく小学生以下の段階です。自分のどく身のまわりのことも出来ないで、言うことは二人分も言っているのが深志生じゃないかしら。

ところで、上履と下履についてもう一言。毎日履き替えているあなたが、ちゃんと区別をつけているかどうか。できているという人は凡そいないだろう。なぜなら、部室へ行くのに、パンを貰いに行くのに、いちいち靴を履き替える人はますないだろうから。それはむりな話かも知れないが、下足のまま上がるのと、上履のままで外へ出るのと、どちらの罪が大きいか。――小、中学校では、コンクリート廊下とか、渡り廊下というのがあった。そこが、上履のまま校舎を離れられる通路だったのです。深志にも、一見コンクリート廊下らしきものがあるにはある。しかしそれは、もはや〝廊下〟ではなく〝道路〟若しくは、庭の一部になってしまっている。そして今や、校舎内の廊下も、次第に道路に変わりつつあるのではないかそうなってしまったのではもう遅過ぎます。

すべての廊下が、道路でなくなった日。その日初めて、毎日上履に替えていたあなたの努力が報われる日であり、だれもが、集団の中に個人を確立した日であると思います。

最後に。この新聞が、飛行機などになって、深志を汚す塵になるのは見るに忍びません。

――・――・――

○小学生の卒業試験

一羽半の鶏が一日半に一個半の玉子を産みます。それでは、九羽の鶏は九日間に何個の玉子を産むでしょうか。

制限時間　五分

（答えは新聞委員会室で発表します。）

無題

〜〜〜ン、と始業のベルがまだ余音を残して響いていました。前の晩に夜ふかしをして、本を読みすぎたせいでしょうか。今朝はいつになく寝坊をして。あわてて家を出たつもりが、学校へ着いたのはもうそんな時間でした。先生がいらっしゃる前に教室へ着ければいいけれど。――もうロッカーへまわって靴をはきかえている時間などとてもなかった。えーい、一日くらいかまいわしない。みんなだって履き替えやしないのだから。

そんな日があってから、もう一年以上の月日が経ちます。その間にいつのまにか、上履も下履もどちらでもいいようになってしまいました。

みんながそうなのだから。めんどくさいから。規則にないから。……etc。理由は人さまざまだろうが、今やそれは、あなた個人の問題としてとまらず、深志全体の問題として発展してしまったのである。

ともかく、最近特に校舎内の汚れがひどくなって来ました。廊下の端には、砂とほこりが、油とまざって積み重なり、教室の内には昨日と同じ紙屑が、だれかの足跡をいくつも残して昨日と同じ所にころがっている。黒板の下だけがチョークの粉で真白で、一、二センチに短かくなったチョークは、みぞを一杯にはみ出す程。恰も、投げて下さいと誘わんばかりに。そして机の中は、プリントと塵紙の山。もはや自然の洗浄を待てる段階ではないのです。

それにしても、どうしてこうまで汚れているのでしょう。師走の嵐が砂を吹き込むからかしら。靴につけたまま泥を持ち込むからかしら。配られたプリントを、ろくに読みもしないで机の下へぽい―

お寿司・コロッケ　天ぷら
味の里
電話　32―2701

なにしろ
喰いに来てくれなきゃあ
話になんねえ。
パパとママとボクと
私の一平
TEL　32―1900

文具・画材・本（BOOKS）・スポーツ品
松本中央通り　遠兵　enhyo
セカンドパルザ
電　32―6350

寄稿募集
何でも結構です
新聞委員会